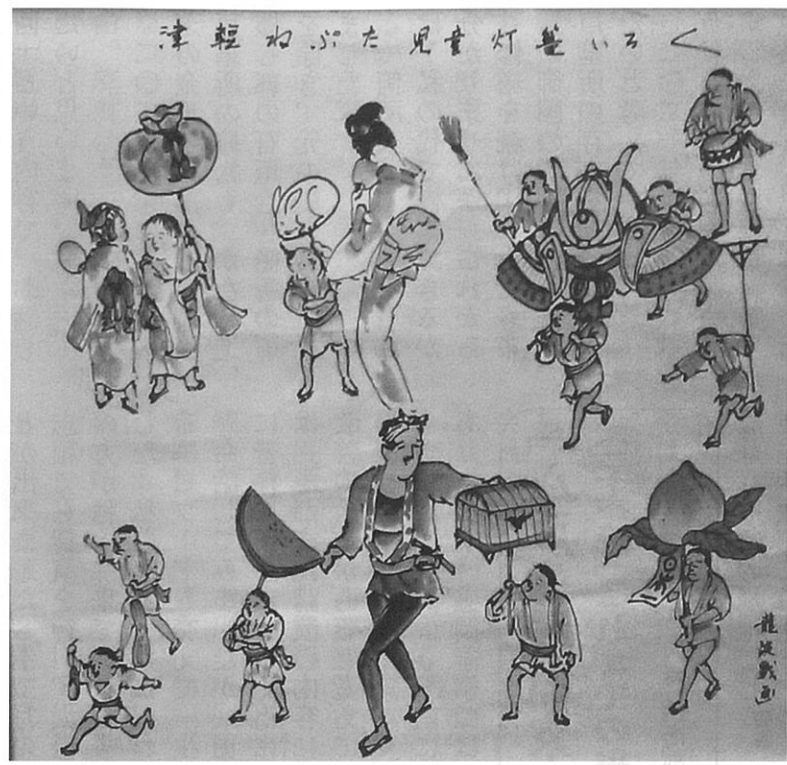


弘前市をはじめとする津軽地域では3年ぶりの暑い夏が終わりを告げた。1722(享保7)年に「柵ふた」という文言が初めて文献に登場してから300年という節目の年でもあった。弘前ねぶたは囃子とともに山車灯籠を引く民俗行事である。津軽地方の代表的な夏祭りのひとつであり、1980(昭和55)年には国指定重要無形民俗文化財に指定された。

弘前ねぶたは扇形の灯籠が特徴的で、時に「金太郎飴」と揶揄される。次々と続く灯籠がみな同じに見える



石澤龍峽「戯画 津軽ねぶた児童灯籠いろいろ」
弘前市立博物館所蔵

るといふ、観客からの視点である。しかし、比良野貞彦の記した「奥民図彙」(国立公文書館内閣文庫所蔵)に見える「子ムタ祭之図」や、平尾魯仙の描いた「津軽年中風俗画卷」中の「柵婦太之図」を見ると、人形型の組ねぶたが主流である。

江戸時代にはさまざまな形の灯籠が作成されており、昭和初期に至っても「扇灯

弘前ねぶた
〜伝統と変化の300年〜

小田桐 睦弥

(弘前市博物館 主査兼学芸員)

争が終わると、翌1946(昭和21)年から早々に戦後初のねぶたが運行された。食事に事欠くような戦後の窮乏の中で、必要な紙や画材を調達し、運行を行うのは並大抵のことではなかったと思われる。扇ねぶたが極端に増えだしたのもこの頃からで、経済的な影響から安価に作成できる扇ねぶたが主流になったのではないかと考えられる。

決して崩れない構成の力によって、人々をして「楷書体ねぶた」と呼ばしめた。もうひとり忘れてならないのが石澤龍峽である。節堂のように緻密な下絵を用意する描き方ではなく、下書きもなしで、いきなり紙の上に墨を置くその描き方は「行書体ねぶた」と呼ばれた。オレンジ色を基調とし、豪壮で激しく流れる強い線は自由に見えて、完成すると下絵があったかのような整然とした整いを見せていた。

籠」よりも「人形ねぶた」(史料表記による)が多い(『弘前新聞』)。昭和中期頃に描かれたとされる石澤龍峽の戯画(写真)においても、灯籠は各種多様である。賑やかだった祭りは、1937(昭和12)年に日中戦争が勃発すると、たちまち中止となり、1945(昭和20)年に日本が敗戦するまで、ほとんど姿を消していた。ところが、戦

節堂は弘前市出身で、東京に出ていたが、空襲が激しくなったため疎開してきた。その際に、「一つ弘前ねぶたに力を入れて模範になるような作品を製作して市民に見せたい」と語ったという(『弘前ねぶた』弘前市・1983年)。

節堂はその言葉通りに今日の弘前ねぶたの様式を確立した。豪壮にして絢爛、かつ優美な大和絵風の彩色

「ねぶた絵は立派な芸術であるべきだ。そのためには絵師たちが心をひとつにして、ねぶた絵の芸術性を高めるために修練していかねばならない」(『弘前ねぶた津軽風のすべて』津軽錦絵作家協会・1997年)。

龍峽はその信念の下に津軽錦絵作家協会の設立に尽力。彼の意志は現在、同会とともに弟子たちによる世生龍会という形で受け継がれている。

東京と青森 654号
2022年10月号